

# 朝鮮

## 十三歳の引揚者

神奈川県 大野 和子

はじめに

この引揚労苦記録は、北朝鮮にソ連軍が侵攻を始めた昭和二十（一九四五）年八月から、私が日本に引き揚げることのできた昭和二十一年四月までの、あの悲惨にして過酷な逃避行の経過を記したもので、「今は亡き父母に捧げる紙碑」でもある。

### 一 元山高女へ入学

昭和二十年一月に、父がそれまで勤務していた

北朝鮮南部の咸興カンコウの小学校から、文川城内朝鮮人小学校の校長として赴任したので、私たち家族も文川に移り、私は文川日本人小学校の六年生に、妹の侑子は二年生にそれぞれ転校した。日本人小学校といっても教室は二室で、先生は校長とその奥さんの二人だけで、まったくの複式授業であった。転校して間もなく四月になり、私は元山市にある、元山公立高等女学校に進学した。

当時の咸鏡南道には、咸興と元山という二つの大きな都市があり、それぞれに日本人中学校、女学校、師範学校があり、さらには朝鮮人学生と共学の中学校もあった。日本人小学校の卒業生は、ほとんどが中学校、女学校に進学していて、地方に住む生徒のために寄宿舎が完備されていた。私

は、家が元山から北へ三つ目の文川駅で降りればよかったので、汽車通学をすることにした。一学期は何とか勉強を主にして過ごしたが、夏休みは返上して、毎日「勤労奉仕」で出征兵士の留守家族の家に田植えに出ていた。また、「国家百年の計」という掛け声のもとで、松苗穂の選別や出荷作業をしたり、陸軍の飛行場の滑走路の草取りなどにも励んでいた。女学校の校舎が、日本軍の施設として接収されることとなり、二学期からは、国民学校の校舎に同居することとなったので、その引っ越しも始めていた。

## 二 女学校の最後

八月九日には、朝鮮半島北部にソ連軍が侵攻してきた、昼夜を分かたずソ連軍の飛行機が来襲して、「空襲警報」のサイレンが鳴り渡り、その都度防空壕に逃げ込んでいた。そんな日が毎日続くようになった。八月十四日の夜も「警戒警報」の発令で避難したまま、明け方の「警戒警報解除」のサイレンまで一睡もできずに過ごしていた。

八月十五日は、勤労奉仕に行くために現地集合の予定だったが、汽車が不通となり集合ができなくなったので、電話で学校に連絡をしたら、「今日は休校、明日は全員、学校に集合するように」とのことだった。すぐに駅から家に戻ったら、母は一歳半になる弟の晋を背負って、国防婦人会の勤労奉仕に出ていた。ソ連軍との戦争に備えて、戦車が通る道の普請のための砂利採取作業ということで、真夏の暑い日差しを受けて川原で働いていた。私は思いがけない休校で、すぐに川原に行き弟を家に連れて帰った。

連日連夜の警報発令で寝不足だった私は、すぐに弟と蚊帳に入り、昼寝をした。

母と、一緒に作業していた人たちは、勤労奉仕の帰りに我が家でラジオの重大放送を聞いていた。「日本が負けた！ 戦争が終わった！」などと泣きわめく声で私も目が覚めた。登校日だった小学校三年生の妹も、臨時休校となって帰っていた。その夜は何事もなく、いつもと同じような夜

が過ぎた。

八月十六日、定時に汽車が動き登校した。学校では、先生方が寄宿生を親元に送り届けるために、既に手分けをして出発していた。登校できた先生と生徒は、全校生の半数ぐらいたった。

校庭で朝礼があつて、校長先生から「連絡があるまで自宅で待機するように」との話があつた。家に帰ろうとしたが、「汽車は動かない」との連絡で、開通するまで学校に泊まることになり、日本軍の営舎から夕食をもらつて食べた。

食事中に「汽車が出るからすぐに駅に集まるように」と言つて、女子師範の生徒が駆け込んで来て知らせてくれた。食事のお礼もそこそこに、駅に向かつて走つた。間一髪で発車直前の汽車に飛び乗ることができた。

これが、四月に始まつた元山女学校生としての生活の最後となつた。それ以後の同級生の消息は、ほとんど不明となつた。生きて日本に帰れたのか、そのまま北朝鮮に取り残されて残留孤児と

なつて生きられたのか、その消息はついに今日まで一人として知ることはできなかつた。

### 三 官舎から追い出し

八月十六日の夕方になると、文川市街が騒然としてきた。一団の朝鮮人のデモ隊が練り歩いていった。口々に「マンセイ！ マンセイ！」と叫び、両手には石を持ってそれを打ち鳴らし「カチツ、カチツ」と音を立てている。デモ隊は市街を練り歩き、郡庁、警察署、郵便局、日本人の家の前などで歓声を上げていた。一団が通り過ぎると、次の一団が来て同じように歓声を上げる。山の中腹にあつた神社は、石を投げられ火を放たれた。神社は瞬く間に燃えあがり、御神体共々灰になつた。今にもこの一団が、我が家にも暴れ込んで来るのではないかという恐怖におびえながら、一夜を過ごした。

翌朝になると朝鮮人の家々には太極旗（現韓国旗）が掲げられていた。今までは、「お金がなくて日の丸を買えない」と言つていたのに、日の丸

の赤い部分に黒色で巴を書いて軒々に掲げ、手には小旗を持っていた。

日本人が一家族しかいない奥地の学校の先生や警察官の家族が、次々と文川に避難して来た。我が家には学校関係者が二十人ぐらい集まった。いざというときには大人数は心強いが、毎日の食べることが大変だった。金融機関は閉鎖していて、行政の機能も停止していた。

父は、学校の事務引き継ぎに出勤し、教育勅語や重要書類の焼却などをして、帰宅後は引揚げのための準備に追われていた。「一等国の国民だつたんだから、一人一個ぐらいは認められるだろう」と、まとめた荷物に日本の宛先を書いた番号札をつけていた。リュックサック一つで追い出されることになろうとは、夢にも思っていなかった。

私はそのとき、かつて昭和十七年に下関で見た、戦時交換船で帰国する外国人の家族の姿と、その足元に置かれた二個のトランクを思い出し、

日本の船が迎えに来るだろうと信じていた。そんなころ、鉄道関係者だけが徹夜で荷物をまとめ、特別仕立ての列車で既に南下したことを、だれも知らなかった。

ミシンや布団を売り、父の蔵書は朝鮮人の先生方へあげ、写真帳から家族の写真をはがして、持ち帰る荷物の中に入れたが、ひな人形などは庭で燃やした。

八月二十四日、元山市のソ連兵が上陸し、翌日には文川にも進駐してきた。市街地の大通りにはソ連兵歓迎のアーチが作られ、ソ連兵を乗せた軍用トラックが次々と入って来た。朝鮮人集団は車を取り囲み、旗を振って「ウラー！ ウラー！」と叫び歓迎をしていた。

「官舎に住む日本人は、官舎を明け渡せ」とのソ連軍からの命令が出て、私たちは日本人小学校に収容された。総勢は六十二人で、警察の武道場から一人一畳ずつ畳の配分を受け、我が家は五人分の五畳をもらい、教室に敷き居場所を確保し、

窓の外に下屋をおろして炊事場も作った。こうしてその日から狭苦しい生活が始まった。

八月三十日に、校庭にソ連軍の乗用車が止まり、自動小銃を構えたソ連兵に、警察署長の大村さんと文川郡の郡主の吉池さんが連行された。二人のその後の消息はまったくの不明となった。

日本の警察に代わり、町を警備する朝鮮人の組織である保安隊から、「武装解除された日本兵が、今日は元山の町はずれの川原に約二万人が野営する。逃亡兵は射殺する。流れ弾が危険だから、姿勢を低くするように」と連絡があった。列車で移送すると、飛び降りて逃走する者が多いので徒歩になったのだそうだ。夜中に何発もの銃声が聞こえた。

八月三十一日朝早く、大勢の足音で目を覚ます。銃も軍刀も没収された十六列縦隊の日本兵が、両端を監視のソ連兵に挟まれて歩いて行つた。最後尾に、一人では歩けず両脇を抱えられ、引きずられるようにしている兵隊もいた。しばらく

くすると、町はずれで銃声が何発か聞こえた。保安隊から「銃殺された日本兵を埋葬するように」との命令。男の人が担架を持って行つた。南の川原に三人、北に一人が倒れており、共同墓地に埋葬。頬と腿に貫通銃創を受けて草むらに倒れていた兵隊を連れ帰つた。四月に結婚した届けの写しを持っていた。名前は瀬戸口、八月に召集。倉庫に隠して看病した。保安隊やソ連兵に見つかる、脱走兵として射殺されるからだ。食事も「子供の方が目立たないから」と私たちが交代で運んだ。医者に診せることもできず、傷口が化膿し菌が頭に回って死んだ。

「引揚列車が出る」という話があつては何度も流れていた、半信半疑だったが、九月一日ついに実現し、私たちが乗つた列車は南に向かつて走つた。人々は貨車の扉を開けて、手を振り歓声を上げた。しかし列車は鉄橋が破壊されていて、三十八度線から先に進めなかつた。結局引き返すことになつた。「どこの駅で降りてもよい」と言

われ、住み慣れた文川に降りた。保安隊が「同じ日本人だから」と、咸興から来た百人以上の難民を、文川の収容所に連れて来た。

咸興の人たちの話は新鮮な情報であった。私は敗戦を境にラジオも新聞もなく、文川で見聞きする以外の情報を持っていなかったたので、「咸興の町はソ連軍との戦闘で、咸鏡北道や満州から逃れて来た避難民であふれ、毎日六十人以上の人が死んでいる」とか、「咸興にたどり着くまでの避難道中の苦勞」や、「鉄橋の爆破を咸興の保安隊が知らぬはずがない。増え続ける避難民を減らすために、列車に乗せて追い出したのだ」など、咸興の人たちの話を夜遅くまで聞いた。文川に泊まった咸興の人たちは、二日間体を休めて南下の準備をし、日が落ちるのを待つて出発した。

その三日後、五歳くらいの女の子が、朝鮮人の青年に連れられて収容所に来た。青年は対応した人に「この子の父母は咸興からの引揚列車で南下したが、祖父と女の子を置き去りにした。体の

弱っていた祖父は、孫のことを私に頼んで死んだ。私は南鮮に行き、一カ月くらいで帰って来ます」と女の子を置いて行つた。渋々預かつた人も、「日本の子供は頭が良いからぜひ養子に」と言つてきた朝鮮人に、その子を売つてしまつた。

九月五日、十六歳以上の男子は保安隊の命令で、毎日鉄道線路の草刈りをさせられた。五日の作業終了後、全員警察署の留置場に入れられた。夜になると男のいなくなつた収容所に、マンドリンと呼ぶ銃を構えたソ連兵が「マダム、マダム」と来る。「子供の泣き声に弱い」と聞いていた女たちは、赤ん坊のおしりをつねつて泣かせた。学校中の赤ん坊と子供の泣き声にソ連兵は逃げ帰つた。

保安隊から弁当の差し入れが許可された。和服姿の婦人は目立つからと子供が行かされた。「いつ殴られるか」「いつ捕まえられるか」怖かつた。朝鮮人を刺激しないように、道の端を目立たぬように歩いた。持つて来た弁当を係に渡し、食べ終

わった空の弁当箱をもらって帰った。

そのうちに、民間人は留置場を出され、別室で私たちと一緒に食べられるようになったが、話を聞くと男たちは、三つの房に座る隙も無いほど詰り込まれているようであった。弁当を運んでいた子供たちの話から「往復に危険は無いらしい」と分かって、奥さんたちが留置場通いを始めた。ただ、ソ連兵よけに子供を背負って行った。

九月八日、思想犯の担当だった力竹巡査の弁当が手つかずで返されてきた。取り調べが厳しく「お前たち日本人の巡査が、俺たちにやったのと同じことをしてやる」と、やかんの水を鼻から入れながら取り調べられた。苦しくなって本当のことを白状してしまったが、留置場に帰って来るともとの上司に責められた。間に挟まって精神的に苦しくなると、「殺してくれ」と叫びながら逃げ出し、射殺された。父たち民間人が埋葬した。お年寄りが釈放された。口止めされているのか、中の様子を話さず、ただ横になって眠っていた。し

ばらくして民間人が釈放、何日か後、警察官も釈放された。警察官はどの人も顔や体に青あざができていて、体を横たえ、うなりながら痛みをこらえていた。

#### 四 射殺された校長先生

隣町の文坪から、文川に住む女学生全員の「元山公立高等女学校在学証明書」が届けられた。鉄道が止まり、国道はソ連軍のトラックが接取物資を満載して途切れることなく走っていた。道を歩くのにも危険を覚える中を、町から町へ、手から手へ渡されて届けられた。内地の学校に転入するときの手続きに必要な書類だから、大事に持ち帰るようにと校長の伝言も伝えられた。

校長先生は敗戦後、全校生徒の在学証明書を書き上げた夜、職員の実家を訪ね「生徒の手に渡して欲しい」と依頼。その帰りにソ連兵に誰すい何かに射殺されたという。遺体は元山の共同墓地に葬られた。私は引揚げ後、校長先生が命を懸けて届けてくれた在学証明書のお陰で、群馬県立桐生高等

女学校に転入できた。

## 五 収容所から流浪の旅へ

九月二十八日午後一時ごろ、銃を抱えたソ連兵と保安隊が十人ほど来た。「日本に帰国用の、迎えの船が元山に來ている。乗船までの二、三日分の食糧と荷物を持って、二時間以内に出発」との命令。妹は弟の子守りを、私は集結地の二、三日分の食料とお握り作り。お米を浸す時間はなかった。母から「これを燃やして」と、写真帳からはがした写真を手渡されたが、自分が写っているのを抜き出して救急袋に隠した。ソ連兵は銃を突きつけては欲しい物を奪うから、私は母が戸棚の後ろに隠していた指輪の袋も救急袋にしまった。

瀬尾先生の家族八人は、敗戦の翌日、夏着のまま逃げて来てはや一カ月、秋風が吹き始めていた。父は瀬尾先生に「必要な物があつたら何でもお持ちください」と言い、布団や衣類、生活用品を自由に持って行つてもらつた。

二時間後、小学校の校庭に、背負えるだけの荷物を持った避難民が集合。父は食糧など重い物を背負い、手には鍋、釜、やかん、バケツを、母は着替えや生活用品を、私は寝具などかさばるが軽い品物、といつても幅は自分の背丈ほどもあり、一人では立ち上がれないほどの重さ。三年生の妹は、一歳半の弟をおんぶ。校庭には小学校に収容されなかつた民間人を含め、文川に住んでいた日本人全員が集合。ご主人を殺された力竹さんは、一年生の子供に荷物を背負わせ、自分は背中に三歳の子を、胸に一歳の子を抱えうえ両手にいっぱい荷物を持っていた。

元山に向けて出発した。難民が担いでいる荷物をソ連兵が奪い、すれ違うトラックに乗つて逃げる。抗議すれば銃を突きつける。歩き始めてすぐに、重くて持ちきれない荷物を道ばたに捨てる人が出始めた。今日まで一緒に生活していた日本人同士が、手助けするどころか争つてそれを奪う。朝鮮人も群がる。



銃を抱えたソ連兵は、町はずれまでついてきたが、すれ違うトラックに乗って帰って行った。保安隊は私たちを隣の文坪の保安隊に引き渡して帰った。野宿を覚悟していたが、警察の武道館に案内され、板の間に毛布を敷いて寝た。

九月二十九日、小山を隔てた元山市街の入口で、「元山は避難民でいっぱいだ。市街地には入れない。引揚船など来ていない。すぐ文川に帰れ」と言われた。私たちはだまされて文川を追い出されたのだ。「明日は必ず移動するから、今晚だけ」を条件に、旧日本陸軍病院に泊めてもらった。めいめいが石を集めてかまどを作り、夕飯を作った。

日本軍は、戦争に負けて退却するとき「生きて虜囚の辱めを受けず」と、動けない者には自決用の手榴弾が渡されるのが慣例であった。病院にソ連兵が来て「歩ける者は前へ」と言われたとき、とっさに「歩けない者は殺される」と思った。やっと歩けるような人も前に出た。このような人

も、普段足を鍛えていない海軍軍人も、連行される途中で落後して射殺されたそうだ。動くことができず、前に出られなかった兵隊は「殺害される覚悟をした」が、全快して退院した後もなんのともがめも受けなかった。

九月三十日、帰国できる希望を失った途端、背中の荷物は重く、行くあてのない避難民の足取りは遅かった。郡主さんと警察署長さんが連行され、町のまとめ役は小学校長の父と郵便局長の伊藤さんとなった。無人の水産工場を見つけて泊まった。工場の機械はソ連軍が根こそぎ持ち去って空っぽ。父が石でかまどを作った。私と妹は近くの松林で燃料になる松ボックリや枯れ枝を拾う。母は食事の準備。工場のコンクリートの床に毛布を敷いて寝た。海辺の工場は、波の寄せる音が絶え間なく聞こえ、昼間は沖の方で機雷を処理する爆音が聞こえ、水柱が上がった。売りに来た餅を食べたり、工場に残された缶詰をみんなで分けたりした。私たちを文川で受け入れるように交

渉する人を出し、二、三日様子を見ることにした。

元山の保安隊が来て「元警察官全員集合」と命令。庭に集合した元警察官全員が、元山に連行された。警察官の家族が一、二回元山の刑務所に面会に行った。その後どこかに移動させられ消息は、途絶えた。

#### 六 文川に舞い戻る

文川の保安隊から「受け入れ」の許可があり、文川に帰る。収容所だった小学校は、私たちが持ちきれずに残っていた荷物の中からめぼしい物を略奪し、それをごまかすために焼いてしまっていた。学校から追い出される前日、徹夜で荷造りしている人がいた。「明日学校から追い出される」という情報を朝鮮人からもらって、荷物をまとめて学校の床下や天井裏に隠した。不審に思った人たちが聞いても、何も言わなかった。「自分さえ良ければ」という汚さ。その人たちも火を付けられるなど思いもよらず、全部焼けてしまった。

#### 七 文川の生活と越冬

##### 住まい

元地主の中村宅とその貸家群。十畳の和室に六家族、十八人が、すべての生活を行う。我が家は三畳間に五人。これで六カ月間生活することになった。

##### 接收された家財

接收された家財が武道館に残っていた。二人に一枚の敷き布団、一人一枚の掛け布団が配給された。それ以外の日用品は、欲しい物をもらえた。母は毛糸の編み棒を、友人の荒畑さんは圧力釜を、後にこれらの品物が収容所生活で役に立った。

##### 食事

各家族が濡れ縁に炊事道具を並べ、石でかまどを作った。五人の一回の食事は米一合、いり大豆一合、お握り大のオカラ。これに水をたっぷり入れ、岩塩で味付けした粥を作った。お菜はなし。これが一日二食。

## 燃料

道路を歩きながら木片を拾った。ときどき、元日本人小学校の学校林で、焚き付け用の枯れ松葉や、松かさや枯れ枝を拾った。荒畑さんがもらった圧力釜は、少しの燃料で煮炊きできた。特に大豆を煮るのにはとても役立つ。

## 水

井戸囲いの周りが凍った。その上に水がこぼれてまた凍った。氷は小山のように高くなり、井戸囲いがほんのわずかししか出ていなかった。滑って井戸に落ちないよう細心の注意を払いながら、釣瓶で水を汲んだ。

## 便所

母屋に一つしかない便所は、すぐいっぱいになった。凍って盛り上がってくる大便は、しゃがむとおしりに付きそうになった。男性が交代で薪割りでたたき割り、捨てに行った。小便は庭のあちこちで用を足した。

## 風呂

一日一部屋の順番。一カ月に二回ほど入れる。水汲みと燃料の準備が大変。部屋に明かりが無いので、風呂の焚き口で、よく親指ほどのじゃがいもの皮むきをした。

## 暖房

父が鍋の内側に粘土を厚く貼り付けて火鉢を作り、お粥を作った残り火を入れた。零下二〇度を超す寒い冬を、人の体温と綿の布団でしのいだ。体を動かすとお腹がすくのと寒いので、なるべく動かないでいた。

## 虱取り

ひなたぼっこをしながら、頭の虱を取った。衣類の虱取りは部屋全員が一斉に着替え、脱いだ物を水に漬け、濡れたまま干す。すると水が凍る。虱も凍った。

## 照明

灯明を作った。皿に油を入れ、ぼろ布をよって灯心にした。油が高いため必要最低限度使用。

## 教育

「日本人小学校」を開校。小学生が登校。妹の侑子の話だと、「日本神話は作り話だ」「天皇陛下は神ではない」の話だとか。革命歌を朝鮮語で覚えてきた。妹は子供だけの生活が嬉しそうだ。敗戦後、子供たちは大声で歌える歌がなかった。いつか「赤旗の歌」を私も覚えてしまった。「ミンチュンエギ、ブルルンギツパル（民衆の赤旗は）」と。

## 通貨

今まで流通していた日本銀行券と朝鮮銀行券のほかに、ソ連の軍票（桃色紙幣）が発行されたが、人々に信用がなかった。父母は帰国後に備えてお金を隠した。どちらかが使用不能になることも考え、日本銀行券、朝鮮銀行券の両方を準備。母の帯留めの袋に紙幣を細かく折って入れる。運動靴は南下のときに備え、普段は手製のわら草履を履き、わら草履の予備をリュックサックにぶら下げた。そのわら草履の鼻緒に百円札を織り込ん

だ。私の指輪を高く買ってくれたシナ饅頭屋の奥さんは、サイコロの中身をくりぬいて金を埋め込んだ。多くの戦乱を生き抜いた人の知恵を教えられた。

## 病気

子供を中心に百日咳が流行。夜中に一人が咳き始めると、部屋から部屋へ津波のように咳が広がった。栄養失調の子供は肺炎になり、死んだ。私たちの部屋では朱亀さんの隼人ちゃんと弟がかかった。特に、夜に咳き込むことが多かった。息を吸い込むとき喉が「ヒーイ」と鳴り、息の続く限り顔を真っ赤にして咳を続けた。吸う息が間に合わないくらいだった。隼人ちゃんが死んだ。お悔やみに来た人は、同じ部屋の隅に寝かされている弟を見て、「次は晋ちゃん番だ」と思ったそう。父は小麦粉とじゃがいもと酢とリンゴを買い、すり下ろしたじゃがいもと小麦粉を酢で練り、胸に湿布をした。熱ですぐにカラカラに乾く。そのたびに湿布を作り直した。リンゴを蒸し

焼きにし、口に押し込んだ。医者も薬もないところで父が昔学んだ医学の知識が、弟の命を救い峠を越えた。このときの教訓、「形のある物は奪われるが、頭の中の知識は一生財産として残る」。そして品物に執着しなくなった。

満州風邪というのが流行した。寒いから閉め切った一部屋に十七人の生活では、全員満州風邪にかかった。高熱が続くが医者も薬もなく、軒から下がるツララで冷やすのが唯一の手当だ。瀬尾先生の六人の子供のただ一人の娘、リツ子ちゃんが死んだ。

小康を得ていた結核患者が再発し、同室の方に迷惑が掛かるからと物置きに引越し、間もなく死んだ。伝染を恐れ、だれも近寄らなかつた。

一つの部屋から二人、三人と死者が出た。棺もなく、墓地の土は硬く凍り付き、穴を掘ることも不可能。遺体を墓地まで運ぶのがやっとだった。

#### 女狩り

ソ連軍の司令部が駐屯してからは、夜九時以降

の外出は禁止されるなど、一応規律が守られ治安は保たれてはいたが、ときに夜になると、明かりのない部屋の障子に黒い影が映る。二人、三人のソ連兵だ。銃を抱え、「マダム、マダム」と入って来る。戸のない障子だけの戸はすぐ開けられる。敗戦直前の根こそぎ召集で、四十歳までの男性が軍隊に取られ、警察官は全員保安隊に連行されてしまい、ほとんどが母子家族。女性たちが大声を上げ部屋から部屋へ逃げ回り、追いつめられ片隅に座り込む。子供のいない女性は、他人の子供を無理矢理に抱いた。普段は「うるさい」とか、「汚い」とか言っていた人に抱きしめられた子供は、逃れようと泣いた。騒ぎを聞きつけた別棟の青年が、下水の溝伝いに保安隊に走り、助けを求めた。しかし保安隊員の来るのが間に合わないこともある。銃を突きつけられて一人の娘さんが連れて行かれ、二、三日後、ふぬけのようになって帰って来た。

ソ連司令官の夫人の話では、ソ連司令官の所

に、朝鮮人の婦人たちから「私たちは商売人だから、日本人の代わりにソ連兵の相手をします」と申し出があつて、その後ソ連兵の夜襲はなくなつた。日本人は朝鮮人の婦人に助けられた。

噂

引揚げの噂が何回となく流れては消えた。自分たちの足で三十八度線の国境を突破するのは、野宿をしても凍えなくなるまでは無理と、ひたすら春を待つ。こんな生活が六カ月続いた。

捨てる

南下している日本人が、山中に捨てられていた女の子を収容所に連れて来た。五円の桃色紙幣を持っていたが、痩せて立つこともできずお粥も食べられないで、その日のうちに死んだ。また、実の娘に置き去りにされた老婆も運ばれて来たが、すぐに死んだ。収容所の年寄りたちは、家族に置き去りにされないようにと足を鍛えるため、毎日共同墓地まで往復するようになった。

## 八 生活の糧を求めて

父の三つ揃いの背広、革靴、母の大島紬なども食糧に化け、売り食いも底をつき始めたころ、父は果樹剪定の腕を見込まれ、リンゴの木を剪定する仕事を頼まれた。リンゴの木の剪定一本一円の仕事であつた。しかも三軒から。父は果樹園の番小屋の一室に泊まり込むことになつた。私がお飯炊きのために連れて行かれた。そして、氷の張る池の水で炊事や洗濯をした。

父は剪定については素人だったらしい。果樹園の主人は、表だつて生活援助などできないので、剪定を口実にして金銭援助してくれたものらしい。

番小屋での生活は楽しいこともあつた。番小屋のオモニ（婦人）が、温突オンデルのそばに置いたかめに、日に何度も水をやってモヤシを育てていた。電灯がない村なのに、切れた電球を買つて来て、破れた靴下を繕う道具にしていた。夜は村人が番人のところに遊びに来たし、父の学校の生徒の親

が大根や白菜、大豆を軒下に置いて行つてくれた。私の所にはクラスの女の子が遊びに来て、カーバイトの明かりの下でたらいに水を張り真鍮の皿を浮かべ、パガチ（冬瓜を干して作つたひしゃく）をかぶせ、パガチとたらいの縁を箸で叩き、歌を歌いながら全身で踊つた。避難生活の中の、思いがけない楽しい夜だった。直接朝鮮人の生活に触れる貴重な体験をした。

父の仕事が終わり、文川に戻つた。饑別に小豆と大根をもらった。母が「朝鮮人の子供になれば白いご飯を腹いっぱい食べられるよ」と言う。「日本人の子供は頭が良いから欲しい」と言つてきたのだ。労働力が欲しかったのか、お嫁さん候補として欲しかったのか分からなかつたが、私は「餓死してもよいから親と一緒にいたい」と断つた。

いつ、だれが、どこで、何を基準に決めたのかは知らないが、敗戦の日、外地に住み、現地に残つた人を、十二歳までの子供は「残留日本人孤

児」とし、帰国希望者には国から帰国費用が出た。十三歳以上は、「自分の意思で残留した」とみなされた。敗戦の日、私は十三歳と十八日だった。もしあるとき「白いご飯」に釣られていたら、私は残留婦人となり、北朝鮮で生涯を終わることになつていた。未だに北朝鮮の残留孤児も残留婦人も、日本国内で話題にさえならず、帰国の手は差し延べられていないのだから。

収容所にいる婦人は、交代でソ連兵の洗濯に行つた。母はソ連軍司令官夫人に気に入られ、洋服仕立て職人である荒畑さんの助手の仕事を得た。昼食に出る黒パンを残して持ち帰り、弟の病後の回復に役立てた。母たちは、ソ連兵が日本人から取り上げた和服の反物で、ソ連婦人のドレスを縫つた。母は赤い都腰巻きを解いて三本取りにして、私にセーターを編ませた。ここで前にもらつた編み棒が役に立つた。

私に松苗の選別出荷の仕事がきた。賃金がもらえ、家族の役に立つて嬉しかった。

## 九 南下の準備

三十八度線を越えて南下する人が出始めた。ある日、突然なんの挨拶もなく黙って出発した。息子さんがてんかん持ちで「集団では迷惑を掛けるから」という人。親しい朝鮮人の手引きで、朝鮮服を着て南下した人などであった。私たちの部屋は四家族に減った。

北から、三十八度線突破を目指す人が一夜の宿を求めて来た。父はその人たちからいろいろな情報を仕入れ、南下に備えていた。満蒙開拓義勇軍の少年からは、どんな形でもよいから、人間と荷物の移動許可書をもらうと良い、と教えられた。彼らは移動証明書を持ち、通過する土地の保安隊に挨拶し、その保護のもとに移動していた。

### 十 南下決行

「このままでは飢え死にするしかない。どうせ死ぬなら、一步でも日本に近づいて死のう」を合言葉に、九十五人が四月十四日出発して南下することを決意した。各自が自分の全財産の目録を

作って搬出証明書を、また三十八度線に一番近い北の町を調べて、文川日本人会の名前で全員の避難民証明書を保安隊からもらった。母はソ連司令官夫人から、日本軍の牛肉の缶詰三個をもらった。私たちの脱出を黙認してくれた。

夜明けとともに元山に向かって出発。いつ保安隊の方針が変わって足止めされるか分からなかった。手間取るとは危険だ。途中、橋の上から右手の山に見える共同墓地に黙礼し、二度と帰ることのない文川の町にも別れを告げた。

夜、元山の街に入る手前で「明朝八時元山駅前広場に集合」と決め解散した。目立たぬように、裏通りの狭い道からバラバラになって元山市内に入った。知人宅に身を寄せる人、駅前で野宿する人、それぞれに一夜を過ごした。

駅前は日本人でいっぱいだった。どのような交渉があったのか私は知らないが、父は忙しく走り回り、汽車の切符代として一族百円ずつ集金した。汽車に乗ろうとする人々で、ホームは混雑を



極めていた。私たちは人々をかき分けるようにして貨車に乗った。みんな持って来た荷物を床に置き、その上に座った。

私たちは荷物ということになっていたので、停車中も扉は開けられないし、声を出すこともできなかった。発見されたら即下車。出発地に送り返される。時間が経てばお腹がすく。準備した非常用食糧、いり大豆、きな粉、干飯ぼしめいなどを食べた。弟も袋に手を入れて食べた。貨物の積み降ろしなのか切り離しなのか、列車は動いたり止まったり、ときには長時間停車した。用を足すにも外に出られず、貨車の隅で済ませた。たまらない臭気が貨車中に充満。出発してから何日経ったのか、だれにも分からなくなった。

貨車の扉が突然開けられ、下車させられた。フツケイという駅名。保安隊に両脇を監視されながら、駅前広場に行く。人数は出発時の半分以下の三十九人。成人男子は父と清先生と獣医の阿部さんの三人。阿部さんは朝鮮語が達者なので、と

ても助かった。保安隊員が小声で「いくら避難民でも全員で百円ぐらいは持っているだろう」と言う。金の無心であった。百円を渡した。駅前広場では、先に列車を降ろされた人たちが集められ、保安隊員が厳重に監視していた。保安隊の指揮官らしいのが「今夜は広場で野宿、明日の列車で出発地に送り返す」と言っていた。

私たちはこの団体の後ろをすり抜け、村外れの二軒の農家に案内された。米を出し合い、明日の朝食と昼のお握りを頼んだ。横になる広さはなかったが、「温突の間」で足を伸ばして寝ることができた。

翌朝、父が全員を集めて挨拶をした。「巡查の家族はご主人を連行され、夫人と幼い子供だけが残されました。私たちは『文川日本人会』として団体で行動し、三十八度線を突破しましょう。男性三人が相談して決めたことに協力して欲しい。できない人は以後個人で行動してください」。

農家で牛車を一日の約束で借りたが、「帰るの

に半日掛かり、外出禁止時間までに帰れないから」と昼過ぎに帰ってしまった。私たちの足元を見て賄賂を取り、南下を見逃した保安隊員、一泊させた農家、牛車引きがみんなぐるになって、私たちをよいカモにしたようだ。

体力のない者が遅れ始めた。「置いて行くぞ」と気合いを掛けたが、一カ所に留まる危険を犯しながら、団体を保って先に進んだ。

月井里という村の保安隊に、移動証明書を持って挨拶に行く。旅館を紹介してくれた。朝鮮人向けの旅館で、温突オシドルが通っている部屋だった。この旅館で一つ後ろの貨車に乗っていて、どこかの駅で切り離され、別れてしまった文川の家族に再会した。聞けば、「コウザン」駅で貨車が切り離されたそうだ。その家族は賄賂を渡して見逃してもらい、後ろの客車に乗り込んだが、「フツケイ」でまた降ろされてしまったという。彼らも翌朝早くに、私たちには黙って出発して行った。

月井里を出て、さらに南下を始める。鉄源とい

う町の入口で保安隊に捕まって、身体検査と荷物の点検をされた。鉄源は国境に近い一番大きな町であった。鉄源は当時三十八度線の北側だったが、朝鮮戦争後は休戦ラインに掛かり、全村南に移転して新鉄源となった。獣医の阿部さんは、持っていた動物の治療薬を「毒薬かもしれない」という理由で全部取り上げられた。「薬は惜しくないんだが、お金を紙に巻き込んで薬瓶の栓にしていたのに」と悔しがっていた。保安隊が追いはぎと違うのは、一人五百円以上の現金は没収、持っていない人には五百円までのお金をくれたことであつた。

鉄源駅前の大通りを歩いていると、駅にいた人に呼び止められた。「咸興日本人会の者です。突破するんですか。どの道を予定していますか」と、疲れた足を引きずって私たちのところまで来てくれた。「自分たちが交渉して確保した道を通ると良い。比較的安全です」と教えてくれた。

「私もこれから咸興に戻り、仲間を連れて通る道

です」この人が一番目の恩人であった。

町はずれで保安隊に捕まった。決まり文句の演説が始まった。「いかに日本人が朝鮮人の汗と血を搾り取った三十六年であったか」であった。ご主人が連行された巡査の奥さんが、一人で保安隊の取り調べ室に呼ばれた。「巡査は生きて帰れない。朝鮮人と結婚しないか」と迫られ、泣きながら部屋を出て来た。

国境が近いせいか一日に三回も保安隊に捕まり、検査、検査で予定の半分も歩けなかった。鉄道の町を外れたところで日が暮れ、野宿をした。私たちが眠った後も、父たち男性は、明日の国境線突破のために長い間相談をしていた。

## 十一 国境突破

朝三時ごろ起きた。出発してすぐ山に差し掛かった。ひどい湿地帯に入った。辺りは暗くて、周りによく見えなかった。雨が降ってきた。泥に靴が取られた。足が滑って転んだ子供が、泣きもせず必死に歩いた。やっとぬかるみを通り抜け

た。父たちが交渉してくれた民家で休んだ。荷物を背負ったまま腰を下ろすと、荷物の重みで体が倒れて、荷物に寄りかかったまま寝込んでしまった。夜が明けてから、全員から金を集めて費用を支払った。この時点で一銭のお金も持たない家族が出てきた。父は黙って集まった金で支払いを済ませた。

国境近辺の地形は、誰も教えてくれなかった。ソ連兵に知られると「軍事秘密を漏らした」と死刑にされるのだそうだ。父は「若い者はすぐ新しいものに影響されるから、信用できない」と、老人を捜して道を探ねた。百円札と阿部さんの朝鮮語のお陰で、良い道を教えてもらった。が、その教えはお金を超えたものであった。この老人が二人目の恩人であった。「国境線を南に越える者はソ連兵に、北に越える者は国連軍に、見つかり次第即銃殺される。ソ連兵は、昼間国境になつている土手で見張っているが、夜中の十二時を過ぎると三十分ごとの巡回になるから、実行は十二時過

ぎがよい」と教えてくれた。

真夜中の十二時過ぎにわざわざ堤防までついて来て、ソ連兵の巡回が通り過ぎるのを確認して、合図してくれた。「浅瀬は川が波立って白く見える、そこを歩くように」と、長いキセルで川面を指し示して帰って行った。月が明るい。

目立たないように黒い布を被って、阿部さんを先頭にして川を渡る。雪解けの水は氷のように冷たく膝上まであるが、だれ一人声も出さず命懸けで渡る。母親に手を引かれている子供が、速い流れに足を取られ三回も転んだが、泣きもせず必死に川を渡った。渡り終えた男性は荷物を降ろすと引き返し、背の立たない子供を肩に乗せ、女性の手を引いて渡った。いつソ連兵に見つかり、射撃されるか分からない、恐怖の中の行動であった。全員無事に渡り終わったが、まだ危険が去ったわけではなかった。一刻も早く川を離れなければと、気持ち焦った。

正面に山が立ちほだかっていた。川上に爆破さ

れた鉄橋が見え、それにつながって町が見えた。見つけられる危険を感じ、離れるように山に入り、急な獣道を登った。登るにつれて道幅が狭くなり、勾配が急になった。しかし後戻りはできない。夜が明けて明るくなれば、北朝鮮側の堤防から丸見えであった。早く山を越えなければと気はせくが、靴が滑った。

木の枝や草につかまり一晚中歩いて、やっと頂上にたどり着いた。暖を取ろうとしたが、雨に濡れた枝にはなかなか火が付かなかった。だれともなく座り込みそのまま眠ってしまった。母が掛けてくれたねんねこ半天に、白い霜が降りていた。川で濡れ、山で滑ってどろどろになった服が、焚き火で乾いた。また歩き始める。半分眠りながら歩いていった。父たちが道を探しに行っている間も、私たちは立ったまま眠っていた。

北に向かつて歩いて来た家族とすれ違った。日本からの帰国者であった。お互いに情報を交換した。ソ連軍の軍票（桃色紙幣）は南朝鮮では使用

できず、紙くず同様とのこと。持っていた軍票を  
進呈し、その家族の無事を祈りながら別れた。

## 十二 脱出成功

暖流里という町でアメリカ兵に出会い、基地に  
連行された。二種類の予防注射を打たれ、虱退治  
のDDTを体中に掛けられた。荷物の検査はち  
らっと見ただけで、まるでばい菌にさわるような  
仕草だった。北朝鮮軍の国境警備状況や兵器の配  
置などについて質問された。最後のお金を出し  
合つてトラックを雇い、一路京城（ソウル）に向  
かった。

夜六時ころ到着、京城の町は電灯が明々ととも  
り、商店が開いていた。私たち避難民とすれ違ふ  
国連の兵隊が、写真機を向けていた。避難民収容  
所になっている大きなお寺に着いた。ここで文川  
日本人会は解散した。鍋墨を顔に塗り、男装して  
いた婦人たちは女性に戻った。

貨車に乗せられ、釜山港に向かった。出国検査  
があった。引揚船、興洋丸に乗った。下関港は浮

遊機雷が多く危険なので、仙崎港に向かつて出港  
し、十三年間生活した生まれ故郷、朝鮮に別れを  
告げた。興洋丸は中国揚子江（長江）の川専用の  
船なので、喫水が浅く揺れが大きいといわれた  
が、玄界灘の航海は穏やかだった。

## 十三 仙崎港上陸

仙崎港は水深が浅く興洋丸は接岸できないので  
沖に停泊し、蒸気船に分乗して上陸した。仙崎は  
小さな港町で、引揚者を泊める施設がないとい  
うので、バスで隣町に運ばれることになっていた。  
ところが、私が気が緩んだのか、荷物を背負った  
まま倒れてしまい、注射をされて仙崎のお寺に泊  
められた。

東京までの三日分の食券と列車の乗車券、引揚  
者証明、軍隊毛布などの配給があった。

昭和二十一年に新円切り替えがあり、新円交換  
は一人五百円までで、それ以上は封鎖されて使用  
できなかった。しかし新円紙幣の印刷が間に合わ  
ず、旧日本銀行券に印紙を貼って使用することに

なった。旧券よりも、印紙の方が大事だと念を押された。もちろんソ連軍票や朝鮮銀行券も紙くずになった。「通貨のもろさ」を身をもつて体験した。

翌日、引揚専用列車に乗った。客車は行き先別になっていて、九州方面は下関で切り離れた。夜中に広島を通過したが、暗い景色の中に黒く焼けた木が見えただけだった。東京品川駅で下車し、上野の寛永寺に収容されたが、寺には行き先のない引揚者が大勢収容されていた。沖縄出身の清先生とはここで別れたが、沖縄はアメリカ軍が占領していて帰れないとのことだった。

#### 十四 父死す

帰国した年、昭和二十一年十二月、妻と三人の子と三カ月の胎児を残したまま、父は心臓麻痺で倒れ、そのまま息を引き取った。

母は、父が「文川からの引揚者三十九人の命を守るために全力を使い果たして、命を縮めた。家族だけで南下していたらあれほどの苦労はせず、

こんなに早く死ぬようなことはなかったであろう」と悔しがったが、私は立派な「戦死」だったと誇りに思っている。

既に戦後五十七年、父を知る人も既にほとんどなく、私も七十歳を過ぎようとしている。娘として、父を讃える最後の機会を与えられたことを感謝しつつ、両親に対する「紙碑」にとも思い、一庶民の過ぎし歴史を記した。

ここにペンを置くにあたり、今ひとつ私の感興小学校以来の親友であり、共に悲惨極まりない避難の道を行んで引き揚げてきた、森田昭子さんの絵手紙を、この『平和の礎』に残し、多くの引揚者の方々が、このリュックサック一つに語り尽くせない万感の思いを持っていることを、現在の人々に知ってもらいたいと思う。

「友がリュックの底に大切に持ち帰った宝物

セピア色の写真をくい入るように見る

そこにはまだあどけない顔が並んでいる

昭和二十年三月咸興小学校の卒業の時のものであった

五十六年ぶりに自分と対面する

目頭があつくなる

終戦からどれほどの苦しみと恐怖を

リュックの中からみていたことだろう」

母よ！ あなたは強かった！

神奈川県 小林 正明

はじめに

私は昭和十三年（一九三八）年、北朝鮮の海州で父、幸雄と母、春の次男として生まれた。父は幼いころに両親に連れられて渡鮮し、小学校、中学校を京城（ソウル）で終えて、東京の大学を卒業すると再び京城に戻り、交通業界に就職して、終戦時には株式会社黄海自動車専務の職にあつた。東京生まれの母は、神奈川女子師範学校を卒

業後、神奈川や東京で小学校の教師をしていたが、縁あって朝鮮にいた父のもとに嫁いだ。

終戦になると、海州はソ連軍の支配するところとなったので、両親は九歳の兄を頭として一歳の弟まで四人の子供を連れて命からがら南に逃れたのだが、その苦労は並大抵なものではなかつたようだ。母はその苦労を丹念に綴り、『吾子よ、これが祖国の大地だ』という題名で一冊の本にまとめ、自費出版をした。母の記録と、私の記憶をもとにして引揚労苦をまとめ、負け戦のもたらした悲惨極まりない実態を、現代の多くの人々に知ってもらい、平和というものがいかに有り難いことであるかを認識してもらえれば、母もどんなにか喜ぶであろうと思ひ、ペンを取つたのである。

#### 一 終戦前後

昭和二十年、当時私は満七歳、最後の国民学校一年生であつた。校門に近づくと、上級生の号令で歩調を高くとり、奉安殿の前では最敬礼をして